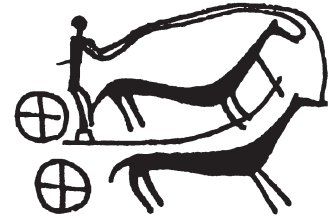


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No. 81



- | | |
|----------------------|----------|
| 北海道地区 FD・SD 推進協議会設立 | (4 ページ) |
| 副学長も挑戦！英語授業 FD | (5 ページ) |
| アカデミック・サポート推進室 | (8 ページ) |
| 北大・ソウル大合同シンポジウム | (14 ページ) |
| 地区大学 SD 研修「大学職員セミナー」 | (21 ページ) |
| 高大連携授業聴講型公開講座はじまる | (22 ページ) |

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

生涯学習計画研究部のこれからの課題

生涯学習計画研究部長 木村 純

1. 生涯学習計画研究部の役割

生涯学習計画研究部は、1995 年に北海道大学の教養部と、当時教育学部に付置されていた産業教育計画研究施設の廃止統合の一環として生まれた研究組織です。2005 年度には、体育指導センターの廃止を受けて、生涯スポーツ研究部門が加わり、生涯学習計画研究部門との 2 つの研究部門で活動してきました。生涯学習計画研究部門では、主に以下のような研究と実践をすすめています。

第 1 に、大学自身が、生涯学習のための教育機関として、自らどのように改革をすすめるべきかを研究することです。社会人を学部や大学院に受け入れ、継続教育をすすめるために、成人学習者にふさわしい学習支援のあり方、カリキュラム、教育方

法の改善や、高大連携への大学教育の活用など、いわば「大学開放」についての研究です。大学院での教育、とくに教育学院での社会人大学院生の指導も、実践的研究として位置づけてきました。

第 2 に、大学として地域住民の生涯学習への参画のあり方を実践的に研究することです。従来、大学は主に「公開講座」を通じて「教養」を目的にした学習機会を多く提供してきました。それらに加えて、大学の研究・教育を基礎にして、i) 地域の産

業の発展や人々の職業的専門性の高度化につながる学習機会や、ii) 地域住民による地域づくり・まちづくりに関わる専門性を高度化する学習機会を、いかに開発するかなどが課題となります。このような立場から北海道大学の公開講座の充実を図るとともに、北海道や札幌市の教育委員会等と連携して、地域住民の生涯学習機会として「道民カレッジ」や「さっぽろ市民カレッジ」の発足とその後の展開に関わってきました。また、札幌市、石狩市、網走市、苫小牧市、長沼町など、道内市町村の生涯学習計画・教育計画づくりや生涯学習専門職員やリーダーの養成にも「生涯学習計画セミナー」(専門型公開講座)などを通じて積極的に関わってきました。今年の生涯学習計画セミナーは、日本社会教育学会のプロジェクト研究チームの協力を得て、「社会教育・生涯学習の評価」について討論を行いました。

第3に、大学自身が自らの学生を「生涯学習者(lifelong learners)」として教育し、社会に送り出すためにどのような教育が必要なのかを考え、実践的に取り組むことです。上記の取り組みの成果を活かしながら、生涯学習に自立的に取り組む学生を育てる大学教育の改革をいかに行うべきかを検討し、キャリアセンターとも協力しながら、キャリア教育やインターンシップなど大学としての人材養成に関わる実践的な研究をすすめてきました。

2. 地域住民の生涯学習への参画としての大学公開講座

大学公開講座は、1946年に文部省(当時)委託事業の「大学開放講座」としてはじまり、1947年に制定された学校教育法で「大学においては、公開講座の施設を設けることができる」と規定されました。大学教育が、いまだエリート段階にある中で、その開放に取り組まれた意義は少なくなかったのですが、それは大学にとっては「外在的・偶然的」なもので、公開講座への教員の参加は個人的なものにとどまり、大学の構造と学問知は社会の課題に対応して変わるべきものではないとされ、啓蒙主義的性格を特徴としてきました。

1964年には社会教育審議会報告「大学開放の促進について」が出されましたが、大学開放が本格化したのは1980年代後半になってからで、臨時教育審議会答申においても「大学は、自らを広く社会に

開放し、社会の要請を受けとめ、公共的な寄与を果たす責任をおう」として、公開講座等への積極的姿勢の必要性が述べられていました。

そのほか、大学の公開講座は啓蒙的性格を脱し、「学習志向型」あるいは「高度教養型」の段階から、地域問題に関わる職業の専門性の高度化や地域づくりの専門性の獲得に関わる公開講座へと発展させる取組も生まれました。それは、大学が生涯学習教育研究センターなど「大学開放」あるいは「公開講座」について専門的に研究する部門を設置し、それをもとに実践を始めたことを背景としています。1994～96年度にわたり、滋賀県が文部省の委託を受けて実施した「地域における生涯大学システムに関する研究開発」の一環として、滋賀県と滋賀大学生涯学習教育研究センターの協同で、県民の環境学習をすすめる機会として生まれ、現在も続いている「淡海生涯カレッジ」や、長崎大学生涯学習教育センターの「雲仙・普賢岳火山災害にいどむー長崎大学からの提言」(1993年)など、大学と地方自治体の連携のもとに地域の課題に取り組む、地域づくりの主体となる人材の養成と結びついた公開講座の実践などがその代表的な成果です。

3. 地域づくりや職業的専門性に資する大学公開講座

文部科学省に置かれた地域づくり支援アドバイザー会議の提言「地域を活性化し地域づくりを推進するために」(2004年8月)では、大学の役割について、次の4点があげられています。①地域づくりのリーダーの養成、再教育、専門的な学習拠点として、知的・物的資源を生かしてより積極的地域社会に貢献すること。②大学の専門的知識や人材、設備等を生かし、地域づくりに関するニーズやシーズの調査分析などを積極的に推進すること。③教員が個人として参画するとともに、大学が組織的に地域に参画して地域社会を活性化していくように積極的に取り組むこと。④教職員等の評価の際に、地域貢献の項目も重要な活動として位置づけること。

地域づくりへの大学の参画が求められる一方で、大学の伝統的な研究・教育では、まちづくり・地域づくりの総合性・横断性、公共性・協働性に十分に応えることはできず、それは先駆的な「非正規の授業」としての公開講座等として組織化できることが

明らかになりつつあります。一方、それらの企画・実施を通して、第1に、地域と大学の連携は、大学知の伝達から、対等な「協同関係」への転換が求められること、第2に、NPOなど地域住民組織との多面的なネットワークが生まれ、それに応える研究教育の体制を大学内や大学間で組織することの必要性が明らかになってきました。

職業の専門性を高める「専門型（職業型）」、「継続教育型」の学習プログラムの開発も行われるようになり、いくつかの先駆的な取組も生まれています。私たちが教育学研究院と協力して実施してきた公開講座「大学職員セミナー」は、今年度から総務部人事課と学務部教務課の今まで以上に強い協力を得て、北海道地区大学SD研修として実施されました。「大学職員セミナー」の実施を中心に、大学職員の継続教育・生涯学習としてSDに貢献していくことも私たちの重要な課題と考えています。本学におけるこれらの取組について、成人教育の実践として成果を上げられるように支援するのが生涯学習計画研究部の今後の課題です。

4. これからの課題

大学が地域と連携する際に求められるのは、地域住民の生涯学習への参画は、単に学問知の啓蒙的な

伝達ではなく、生涯学習あるいは成人教育の実践の支援であることを自覚することです。大学が生涯学習機関として改革をすすめる基礎として、そのような自覚を大学全体のものとするのが、私たちの当面する最も重要な役割であると考えています。

大学が公開講座等を通して地域住民の生涯学習に参画する時、第1に、職業や地域づくりに役立つような学習機会を開発するとともに、その取組を発展させて、高齢者の受講に偏った現状から脱する一方、第2に、高齢社会化の深化のもとで、高齢者に大学はどのような学習機会を提供することができるのか、それらに関わることが大学の教育と研究にどのような意義をもつのかを明らかにすることも課題となっています。

地域と連携する場合、生涯学習の公共性を教育行政や一般行政（財政部局を含む）に理解させる役割も大事です。地域づくりのすぐれた学習機会を協働で創造していくこと、大学内や大学間の研究ネットワークづくりを基礎とした学習講座の企画開発と実施、連携の窓口を多様化し、地域の学習コーディネーター（生涯学習・社会教育関係職員、学習活動のリーダーが中心となります）の継続教育に積極的にかかわることなどが、今後ますます重要になっています。



センター CENTER

北海道地区 FD・SD 推進協議会設立総会

北海道地区における、国公立大学等の FD（教員研修）、SD（職員研修）及び TAD（ティーチングアシスタント研修）の推進に係る情報の交換・共有やプログラムの共同開発を目的として、「北海道地区 FD・SD 推進協議会」が発足しました。

本協議会は昨年 12 月から道内の大学が参集して、その設立を計画したものです。予算的な裏付けはありませんが、長期的に必要な組織であることが認識され、設立に到りました。当推進協議会は、参加校である道内 53 の大学・高等専門学校が連携・協同して、FD、SD 及び TAD の推進に係る情報の交換・共有やプログラムの共同開発を行うものです。

10 月 8 日（木）15 時 30 から学術交流会館 大講堂で開催された設立総会には、関係者約 100 名が出席しました。その第 1 部では佐伯北大総長の挨拶の後、規約案の審議や推進協議会の中心となる幹事校の選出が行われました。その後幹事会が開催され、北海道大学を代表幹事校とし、推進協議会の事

務局を置くことが了承されました。

第 2 部では文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室の高橋学務係長より挨拶の後、国立教育政策研究所高等教育研究部の川島啓二総括研究官より、「これからの FD に求められるもの～大学教育の革新と教員の在り方～」と題した記念講演が行われました。それによれば、日本国内ではこれまでも FD が各大学で実施されてきましたが、成果はあまり上がっていないとされています。これは、FD の効果の評価をしていないことや、現場の必要性に応じた FD になっていないことなどの理由によります。今後期待されるのは、教育改善と制度改革が統合されたシステム作りと、その中における効果的な FD 活動です。

終了後、北海道大学ファカルティハウスエンレイソウで、情報交換会が開催され、講師も含めた 40 名が参加し、貴重な情報交換の場となりました。

（細川敏幸）



写真 1 佐伯総長の開会挨拶



写真 2 川島啓二氏による記念講演

国際化加速に向けた FD

～目指せ！バイリンガル大学～

国際企画課国際教育連携支援チームは高等教育機能開発総合センターと共催で、12月1日（火）～2日（水）にわたり、上記のテーマでFDを実施しました。第1日目は計208名（教員160名、職員48名）、第2日目は計174名（教員164名、職員10名）が参加し、活発な討論と情報交換が行われ、両日ともに佐伯総長の講評で締めくくられました。アンケートでは様々な意見や要望が寄せられ、この2日間のFDによって全学的に課題を共有できましたので、今後は一丸となって本学の更なる国際化の促進が期待されます。

第1日目「オランダの大学に学ぶ北大の国際化戦略」

前半は、2009年8月末に行われたライデン大学・デルフト工科大学でのFDプログラム参加者から、両大学の国際化戦略について報告がありました。

ライデン大学は、2005～2009年まで5年間に全学的な国際化プロジェクトを実施しています。2005年には、言語政策をバイリンガル体制へ根本的に転換し、外部から新たに採用された国際担当副学長の下に国際室が置かれました。また、「教育開発センター」および「外国語センター」が教職員研修を体系的に担っています。

デルフト工科大学は、1999年のボローニャ宣言を受けてカリキュラムや学位システムの大変革に取り組み、刷新には明確なヴィジョンの共有と強力なリーダーシップが不可欠であることを学びました。2005年から大学院の授業を全て英語化していく過程で、様々な経験をし、英語授業化を実現する際のステップや教訓、国際的な高等教育マーケットでは教育上のミッションを特定することの重要性など、多くを学んだことが紹介されました。

報告の最後には、両大学で教職員対象に実施されている英語力査定試験について紹介があり、本FDのアンケート結果では、本学の教職員がこの点について高い関心を持っていることが示されました。まとめとして、本学での英語による授業実践について、組織的な支援策が提言されました。

後半は、本学の国際化戦略の課題と目標についてパネルディスカッションが行われました。最初に本堂理事・副学長（国際交流担当）から、本学の理念である「国際性の涵養」および少子化に伴う大学経営、学部と大学院での異なる授業展開という観点から、本学がどのようなスタンスで国際化に取り組もうとしているかについてお話がありました。脇田理事・副学長（教育担当）からは、バイリンガル化をどのように行うかについて、歴史的背景も踏まえてお話があり、ある時点でバイリンガル化に踏み出

写真1 佐伯総長の講評

写真2 第1日目パネルディスカッション

す覚悟を一丸となって決めるよう提案されました。

その後、事前に寄せられた質問の中から、本学が目指す国際化の戦略的な目標、国際化を進める時の教育上のサポート、留学生支援と事務のサポート体制について意見が交わされました。

最後に佐伯総長の講評として、次期中期目標・中期計画の大事なキーワードとして「世界に開かれた大学」および「可能な限り世界の水準に近づいた教育システム」が挙げられ、実現に向けて人的・資金的支援をしていきたいと述べられました。

第2日目「やってみよう！英語での授業」

始めに脇田理事・副学長から開会の辞で、第1日目に佐伯総長が述べた「世界に開かれた大学」とは、世界のどこから来ても自由に意思疎通ができる大学であり、その際の共通言語は英語が中心になるとのお話がありました。

前半は、工学研究科で実施されている英語での授業について、日本人学生や留学生からの期待やフィードバックなどが紹介され、英語の流暢さが一番の問題ではなく、ティーチングに関しての教員の熱意や努力が重要であることが述べられました。

次に、高等教育機能開発総合センターの国際化に関する取り組みについて、国際教育連携支援チームと共催のFDのほかに、昨年から進めている今後10年の次世代FDのための研究や、筑波大学で行われたワークショップなどについて紹介がありました。マイクロティーチングのワークショップについ

ては、文学研究科向けFDでの様子をビデオで見せながら、お互いのデモレッスンの良い点から学ぶ姿勢の大切さや、英語授業のFDでマイクロティーチングを行うメリットについて説明がありました。

後半は、「見てみよう！英語での授業」と題して、本堂副学長が先陣を切り、続いて「文学研究科向け英語による授業に関するFDプログラム」および「ライデン大学FDプログラム」参加者を含む4名の教員がデモレッスンを行いました。これは、マイクロティーチングと同様に、5つの異なるタイプのレッスンから良い点を学び、参加者に自分に合った授業のイメージを持ってもらう趣旨で、アンケートでは大変参考になったとの意見が多く寄せられました。

最後に佐伯総長の講評として、第1日目はなぜ英語による教育が必要か、から始まり、第2日目は実際の英語による授業について紹介などがありました。まずはやってみることから始めるのが大切で、組織や全体構想を生み出すまでには時間がかかるため、それまでは各教員の努力で実績を作っていたきたいと述べられました。

発表資料や報告書などは、ホームページに随時掲載されます。「国際化加速の取組（ダブル・ディグリー、英語による授業のFD等）」をご覧ください。

<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/e/wabun/index.html>

問合せ先：shien@general.hokudai.ac.jp

(学術国際部国際企画課 国際教育連携支援チーム
コーディネーター 佐羽内喜久子)



写真3 第1日目 会場の様子



写真4 第1日目 三上直之准教授の発表

表1 プログラム

＜第1日目＞ 12月1日(火) 10:00-12:00

テーマ:「オランダの大学に学ぶ北大の国際化戦略」

- ・開会の辞 蟹江 俊仁 教授(工学研究科)
- ・ライデン大学・デルフト工科大学でのFDプログラムについての報告
「プログラム概要」橋本 善春 教授(獣医学研究科, ライデン大学・デルフト工科大学でのFDプログラム団長)
「ライデン大学の国際化プロジェクト」三上 直之 准教授(高等教育機能開発総合センター)
「デルフト工科大学の国際化プロジェクト」泉 典洋 教授(工学研究科)
「教職員に求められる英語力」松下 大介 准教授(理学院)
- ・本学の国際化戦略の課題と目標
ファシリテーター:佐々木 隆生 特任教授(公共政策大学院)
パネリスト:本堂 武夫 理事・副学長(国際交流担当), 脇田 稔 理事・副学長(教育担当), 橋本 善春 教授(獣医学研究科)
- ・講評と閉会の辞 佐伯 浩 総長

＜第2日目＞ 12月2日(水) 10:00-12:00

テーマ:「やってみよう!英語での授業」

- ・開会の辞 脇田 稔 理事・副学長(教育担当)
- ・「英語での授業 ～工学研究科の学生の声～」 ウィラワン マナクン 講師(工学研究科)
- ・「マイクロティーチングを活用しよう」
「高機能センターの取り組み」 安藤 厚 教授(高等教育機能開発総合センター)
「マイクロティーチングのワークショップ」 山岸 みどり 教授(高等教育機能開発総合センター)
- ・「見てみよう!英語での授業」
「副学長も挑戦!」 本堂 武夫 理事・副学長(国際交流担当)
「宮澤賢治を英語で!」 中村 三春 教授(文学研究科)
「バイリンガル形式:日英チャンポン」 池田 元美 教授(地球環境科学研究所)
「私にでもできる英語の授業」 佐々木 克彦 教授(工学研究科)
「学生を巻き込んで!」 常田 益代 教授(留学生センター)
- ・講評と閉会の辞 佐伯 浩 総長



写真5 第2日目 本堂理事・副学長のデモレッスン



写真6 第2日目 会場の様子

アカデミック・サポート推進室が発足

北海道大学では、平成 23(2011) 年度入試より、従来の学部別入試とならんで、理系・文系という大きなくくりの募集単位に基づいた「総合入試」を導入し、学生の多様なニーズに即した大幅な教育システムの改変を予定しています。

これに対応して、本センターでも、新たなシステムの構築と発展のために、10月1日より以下の5名の特定専門職員が採用されました。

アカデミック・アドバイザー補佐：岡墻 裕剛

アカデミック・インストラクター：齊藤 準，日吉 大輔

アカデミック・アナリスト : 柴田 洋, 竹山 幸作

5名は、現在は本センターのアカデミック・サポート推進室で勤務していますが、来春からは正式に発足するアカデミック・サポートセンターで、学習支援を中心とした活動を行っていく予定です。

(川端 潤 農学研究院教授)

アカデミック・サポート推進室長)

10月1日付けで特定専門職員に採用されました。岡崎裕剛(オカガキヒロタカ)と申します。アカデミック・サポート推進室で、アカデミック・アドバイザー補佐として勤務しております。採用前は、文学研究科の言語情報学講座で専門研究員と事務補助員を兼務していました。研究の専門は日本語学・国語学と呼ばれる分野で、常用漢字やJIS漢字といった集合としてとらえた場合の漢字の研究を行ってきました。博士論文は、明治時代の日本研究家であるB.H. チェンバレンの『文字のしるべ』(1899)という資料についてまとめ、2008年3月に博士(文学)を取得しました。

現在の業務は、今後導入される総合入試への対策として、各学部・学科・コース等の教育研究内容を整理・収集した「アカデミック・マップ」の作成を

第一の目的としています

が、学習支援やFDに関

する内容にも参加してい

ます。現状では補佐すべ

きアカデミック・アドバ

イザーの就任が未定で、

今後の業務形態も模索中

ですが、可能な限り多く

の業務に携わり、教職員

と学生の皆様のサポートができるようにがんばりたいと考えています。

ご迷惑をおかけすること多いかと思いますが、
お力添えのほど、何卒よろしくお願いします。

(岡墻裕剛)

10月より、アカデミック・インストラクターとして採用されました、齊藤準と申します。インストラクターは、主に初年次の学生さんを対象に、基礎科目に関する学習上の質問や相談をお受けして、サポートさせていただくという役割です。私は理系科目を中心に担当させていただく予定です。来年4月のサポート体制開始に向けて、目下準備作業を進めております。

今回の採用以前は、本学理学研究院物理学部門の専門研究員として、素粒子論の研究に従事しておりました。素粒子とは、宇宙を構成するあらゆる力と物質の基本要素です。現在のところ素粒子の理論は、一部の例外を除いては、近似的で現象論的な計算手法でしか定式化することができていないのです。

が、そうした近似や現象

論に依らない理論を構成

するための、一つの道具

立てを与えようというの

が、これまでの私の研究

内容です。

こうした研究を直接日

常に役立たせることはな

なかなか難しいのですが、研究を通じて得た経験や知識を、少しでも学生さんへのサポートに役立たせることができれば嬉しく思います。また教職員の方々にも、何かお役に立てることがありましたら、是非お声がけいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(齊藤 準)

10月からアカデミック・インストラクターとして勤務しております、日吉大輔と申します。

3月に北大大学院を修了しました。大学院ではギリシア哲学を研究しておりました。出身は東京都です。北大文学部に3年次編入で入学するために札幌へ来たのが10年ほど前になります。

これまでの北海道での暮らしの中で印象に残っていることは、冬の深夜、建物にできた氷柱をアスファルトの地面に落としたときに、いかにも透明感のある音が聞こえたことでした。ささやかだけれど、北海道の自然と札幌という都市の中でつくられた音

でした。それは哲学に似て、自然と人間、社会との間に広がる響きのよう
に聞こえました。

今後の仕事として、都市と自然の中に住む北大の学生さんたちの、学習のお役に立てればと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

(目吉大輔)

2009年10月よりアカデミック・アナリストとして採用されました柴田洋と申します。以前は北大農学部博士研究員として勤務しておりました。専門は細胞遺伝学で、染色体を通して生物の進化を考える研究を行っていました。染色体という言葉には馴染みが薄いかと思いますが、シマシマ模様の染色体の模式図はドラマ、漫画、アニメなどに度々登場しています。染色体と関連の深い用語に「ゲノム」という用語があり、最近はこちらを耳にすることが多いかもしれません。よく聞かれるものに「ヒトゲノム計画」や「ポストゲノム」というものがあり、どこかで見聞きされたことがあるかと思います。

“ゲノムとは生物をその生物たらしめるのに必須な最小限の染色体セットである”とするゲノム説を提唱された木原均先生は北太農学部のご出身です。

その影響か、北大では多くの研究室で染色体を対象とした研究が行われています。このように北大にゆかりのある学問を北大で学ぶことは学問の歴史を感じられ面白いことではないでしょうか。

現在アカデミック・アナリストとして、入学者の方がどのようなことを北大で学びたいのか、どのようなことを北大に期待されているのか知るためのアンケートの作成を担当しております。このアンケートを通して、入学者の方が北大で学びたいことを見つけた際のお手伝いできればと考えております。宜しくお願いいたします。

(柴田 洋)

この度、アカデミック・アナリストに着任しました竹山幸作と申します。わたしは、1998年に本学理学部物理系に入学し、物理学科に進学後、高圧物理学研究室にて高温超伝導体に関する研究を行ってきました。「高温」といっても -200°C というような世界なのですが、その発現機構はまだ解明されておりません。この発現機構の解明は、夢の室温超伝導の発見、さらには高度な技術革新につながるかもしれないものです。

この研究にて博士号を取得後、この9月まで「理数応援ニューフロンティアプロジェクト」の教育コーディネーターをつとめていました。このプロジェクトは、文部科学省「理数学生応援プロジェクト」

ト」の北海道大学版で、
数学・物理に興味のある
学生に、最先端の研究に
触れる機会を提供してい
ます。現在も継続中です
ので、興味のある方は参
加してみてください。

そして、今回のアカデミック・サポートセンターへの参加になったわけですが、これまでお世話になってきた北海道大学に微力ながら貢献できればと思っておりますので、今後ともよろしく願います。
(竹山幸作)

ICT 活用教育セミナー（予告）

～ e-ラーニング運用と ICT 活用の効果～

来たる 2010 年 2 月 4 日（木）に、北大学術交流会館で北海道大学、北海道地区 FD・SD 推進協議会と放送大学の共催により「ICT 活用教育セミナー」が開催されます。

近年の情報コミュニケーション技術（ICT）のめざましい発達に伴い、欧米諸国をはじめ韓国やシンガポール等のアジアでも e-ラーニングを中心に ICT を活用した教育の導入や普及が進んでいます。日本でも「IT 新改革戦略」において、インターネット等を用いた遠隔教育を行う学部・研究科の割合を 2 倍以上にする目標を掲げ、文部科学省では特色 GP・現代 GP、教育 GP 等により e-ラーニング、遠隔教育普及への支援を推進しています。

現在、大学では教育内容の高度化・多様化の一方で、限られた人材・予算の中で効果的な教育の実施が求められており、このニーズに応える方法として e-ラーニング等の ICT の活用が注目されています。

しかし、これらの高度化された ICT について、個々の教員にはなかなか情報が入ってこないのが現状ではないでしょうか。まず、ICT では何ができるのか、そして自分の授業にどのような恩恵があるのかを教員に見てもらうことが大切です。

本セミナーでは、e-ラーニングの活用方法や事例、特に LMS（Learning Management System）の活用方法などを北大の事例も含めて紹介し、また、インストラクショナルデザインの視点からみた ICT の効果について説明します。

ぜひ、このセミナーを ICT 活用教育の導入や推進に役立てていただきたいと思います。

詳しくは以下の放送大学 WEB ページをご覧ください。

http://www9.code.u-air.ac.jp/seminar/seminar_h21/100204/resume.html

（山田邦雅）

表 1 講義内容（予定）

2010 年 2 月 4 日（木）13:00～16:30 北海道大学 学術交流会館
e-ラーニング活用によるブレンディッドラーニング —効果、効率、魅力のある学習、教育組織の実現— 仲林 清 放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター 教授
初習外国語教育の IT コンピュータラーニングシステムについて 伊藤 直哉 北海道大学外国語教育センター 准教授
ラーニング（コース）マネジメントシステム「ELMS（エルムス）」について 布施 泉 北海道大学情報基盤センター准教授
ラーニング（コース）マネジメントシステムのフリーソフト 「Moodle（ムードル）」の活用について 山田 邦雅 北海道大学高等教育機能開発総合センター 特任准教授
ICT 活用の効果—インストラクショナルデザインからの視点— 内田 実 放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター 特定特任教授
入場無料、定員 100 名

UC バークレー校の講師による 大学院生のための大学教員養成研修講座（予告）

来たる 2010 年 3 月 18 日(木)～24 日(水)に、「大学院生のための大学教員養成研修講座：ティーチングとライティングの基礎」を開催します。

UC バークレー校では、将来の大学教員を目指す大学院生への支援プログラムとして、ティーチングとライティングの指導を行っています。

これを北大に移入する可能性を探るため、バークレー校のフォンヘーネ先生、ソラッコ先生を迎えて、上記講座を行います。受講者 30 名、見学者 10 名以内で、他大学からも若干名の参加者を募ります。詳細は表 1 Syllabus およびセンター HP をご覧ください。
(安藤 厚)

表 1 Syllabus

Subject	Seminar (Workshop) in English for Preparing Future Faculty: Introduction to Teaching and Writing for Graduate Students
Instructors	Atsushi Ando, Professor, Graduate School of Letters, Hokkaido University Eijun Senaha, Associate Professor, Graduate School of Letters, Hokkaido University Toshiyuki Hosokawa, Professor, Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University Linda von Hoene, Director, Graduate Student Instructor Teaching and Resource Center, University of California, Berkeley Sabrina Soracco, Director, Graduate Division Academic Services, University of California, Berkeley
Date	March 18, Thu., 19, Fri., 22, Mon., 23, Tues., 24, Wed., 2010
Place	Center for Research and Development in Higher Education, Hokkaido University (Detailed information will be given later)
Course Objectives	Enables graduate students of any discipline to obtain basic skills, knowledge and know-how to manage education and research with effective communication skills as prospective future faculty. This workshop aims to provide such skills of teaching and writing by the renowned instructors from UC-Berkley and introduces their PFF, or Preparing Future Faculty, program.
Course Goal	1. Obtain knowledge and skills in teaching as a faculty. 2. Obtain knowledge and skills as Teaching Assistant. 3. Obtain skills to teach how to write and edit proposals and essays for academic journals and job application. 4. Obtain knowledge and skills for academic presentations, discussion, and peer reviews in English. 5. Become able to explain tasks of academic professions. 6. Obtain knowledge and skills as international, academic professional.
Course Schedule	1. Introduction 2. Basics of Teaching 3. Basics of Academic Writing 4. Syllabus Making (Course Objectives) 5. Application for Conference 6. Keynote Speech and Panel Discussion 7. Syllabus Making (Grading) 8. Sending Essays to Int'l Journal 9. Abstract Writing 10. Large Class Management 11. Class Management (harassment, etc) 12. Revision of English Essays 13. Course Reviews 14. Student Presentations 1 15. Student Presentations 2
Grading System	1. Course works: 50% 2. Presentations: 30% 3. Class Contribution: 20%
Textbooks, etc.	No textbook required. Handouts will be distributed.
Prerequisites	Number of students to be accepted is 30.
Reference	Contact us by Email: presiden@high.hokudai.ac.jp

全学教育 GENERAL EDUCATION

全学教育委員会報告（第78回）

平成21年12月3日(火)に第78回全学教育委員会が開催され、次の議題について話し合いました。

議題

1. 大学以外の教育施設等における学修のうち文部科学大臣が定める学修を全学教育科目の授業科目の履修とみなし単位を与える場合の取扱要項の一部を改正する要項(案)
2. H22年度全学教育科目の開講計画
3. H22年度全学教育科目に係るTA
4. H23年度からの初習外国語の選択方法
5. H18年度からの新教育課程の検証及びH22年度の実施に向けての検討・改正内容
6. H22年度全学教育部の行事予定(案)
7. H22年度全学教育科目のシラバス作成
8. H22年度入学者に対する履修相談会MANAVIの実施(案)
9. その他:H22年度全学教育科目成績評価基準のガイドライン

報告事項

1. 学部別GPA及び全学教育科目GPA(第1学期速報値)
2. 英語単位「優秀認定」
3. H21年度第2学期履修者数
4. 成績評価・授業評価結果検討部会からの報告
5. 2009年度英語IIオンライン授業の報告
6. その他:H21年度第1学期全学教育科目における学生からの成績評価に関する申立て

2年次以上でも英語演習優秀認定が可能に

現行の英語単位優秀認定制度では、1年次に限定されている申請の時期を、学生からの要望に応じて見直し、2年次以上でも英語演習の優秀認定を可能とし、また1学期に申請した科目は1学期の単位として認定するよう改めました。これにより、進級・分属の際に有利になる場合があります。

H22年度全学教育科目の開講計画

H22年度の開講計画(11月末現在)が了承されました。開講総コマ数は1,990コマ(21年度は1,979コマ:開講中止の45科目を除く)になります。科目別の開講数は、次回に改めて報告します。

H22年度のTA採用計画

全学教育でのTAの必要理由、人数、経費が議論されました。来年度は21年度に比べ、約291万円増、全体で4,648万円になります。その理由は①履修者が70名以上の講義のTA活用を奨励したこと、②体育学でのTA採用の見直し、③試験監督補助などです。TAを有効に活用して、授業の充実・実質化に努めていただきたいと思います。

H23年度からの初習外国語の選択方法

初習外国語の選択は、入学後にどのような外国語が必要か十分な情報がないまま、入学願書提出時に記入しているため、入学後に変更の問い合わせや、選択ミスに起因する問題が起こっています。そこで、初習外国語も入学後(4月)に選択する方向で、ガイダンスの方法や申請の日程、教務情報システムの開発等、必要な対応について検討を進めます。

また、H23年度の総合入試導入に伴って、文系学部でも、外国語は英語及びその他の外国語1つが必修になります。その際、能力と意欲のある学生は、さらに2つ目の初習外国語(ドイツ語I、II等)が履修できるよう、検討します。

新教育課程の検証と次年度に向けての検討

H18年度新教育課程の検証として、単位の実質化に伴う学部別GPAの推移、学部別のGPA総分布、平均履修登録単位数、科目別GPA、授業1回あたりの自習時間等が報告されました。この5年間で、GPAは着実に上昇しています(1学期:2.23→2.40)。H17年度以降の入学年度別の学年・学期ごとのGPA・履修単位数も報告され、

H21 年度 1 学期には全学平均で 21.4 単位を履修しています (上限設定導入前の H17 年度は 29.9 単位)。H21 年度 1 学期の成績分布は、全学教育全体の平均で「秀」13.2(12.4)%,「優」32.9(33.5)%,「良」33.7(33.6)%,「可」13.6(14.0)%,「不可」6.5(6.0)%でした (カッコ内は H20 年度 1 学期)。

今年度から導入された「自由設計科目制度」は、1 学期には全体の約 4 割にあたる約 1,000 人が利用し、成績発表後の登録変更により全学平均 GPA は 2.40 → 2.43 に上昇しました。

そのほか、総合科目の単位数を 1 単位としたこと、英語 IV の抽選による履修調整、外国語演習の (履修希望者 3 名以下の場合) 開講中止など、今年度から導入された新制度は特に問題なく運用されていることから、H22 年度も継続されます。

以上、授業改善の参考にしていただきたいと思います。

H20 年度全学教育部の行事予定

ほぼ例年通りの日程です。

入学式	4 月 8 日
1 学期授業開始	4 月 12 日
初習外国語統一試験	8 月 3 日
1 学期授業終了	8 月 12 日
夏季休業	8 月 13 日～9 月 30 日
成績報告 (Web) 締切	8 月 20 日
1 年次学修簿 Web 公開	9 月 27 日
2 学期授業開始	10 月 1 日
冬季休業	12 月 27 日～1 月 4 日
初習外国語統一試験	2 月 4 日
2 学期授業終了	2 月 9 日
成績報告 (Web) 締切	2 月 17 日
1 年次学修簿 Web 公開	2 月 28 日

H22 年度全学教育科目のシラバス作成

次年度全学教育科目のシラバスは、教務情報システムへ教員が直接入力することになっています。締め切りは 1 月 29 日 (金) です。

H22 年度入学者に対する履修相談会 MANAVI

来年度も、上級生の協力をえて、新入生向け修学サポート MANAVI を実施します。①ボランティア室等を通じて学生を募集し、②教務課と連携して実施します。H20 年度は 63.2%, H21 年度は 75.5% の新入生が利用しました。

H22 年度全学教育科目成績評価基準のガイドライン

成績評価基準のガイドラインは、H22 年度から Web 上で学内公開されます。また、認証評価の訪問調査で、成績評価基準で単純に出席点を加算することは厳格な成績評価の観点から問題があると指摘されたため、科目責任者にその点の見直しを依頼しました。

主な報告事項

- H21 年度 2 学期の履修希望者 3 名以下による開講中止は、一般教育演習 1 (H20 年度は 3) 科目、外国語演習 15 科目でした。
- 成績評価結果に極端な片寄りがあると思われる科目 (GPA 平均が 3.0 以上, 1.8 未満: (H20 年度 2 学期) 15 件, (H21 年度 1 学期) 17 件) についての報告と、問い合わせに対する回答についてのコメントが、成績評価・授業評価結果検討専門部会からありました。また、H23 年度からの総合入試導入を控えて、H21 年度 2 学期から問い合わせの基準を GPA 【2.9 以上, 1.9 未満】とすることが報告されました。
- 英語 II オンライン授業の報告で、TOEFL-ITP の平均点は昨年から 2 ポイント上昇し (468.1 → 470.1), 英語単位の「優秀認定」は 128 (H20 年度は 131) 名でした。
- 学生からの成績評価に関する申立てが 3 件ありました。クラス担任から学生、科目責任者から授業担当教員に問い合わせた結果、いずれも成績評価は妥当との結論でした。
(小野寺彰 理学院教授・センター長補佐)

高等教育 HIGHER EDUCATION

北大・ソウル大合同シンポジウム

「大学での学習の質をいかにして高めるか」 「国際化の取り組み」

恒例の北大・ソウル大合同シンポジウムの一環として、ソウル大学・大学教育学習センター (CTL) と北大高等教育センターによる分科会「大学での学習の質をいかにして高めるか」が、11月19日(木)午前10時よりソウル大学 CTL3 階の会議室 301 で行われました。この分科会は今回が初めての試みで、ソウル大学 CTL から4名、北大から6名(安藤、西森、山岸、細川、山田、斉藤)、ソウル市内の他大学から3名の参加がありました。

CTL のリム・キョンフン・センター長が会合の趣旨などを述べた後、細川が北大の最近の教育改革について説明しました。全学教育の2006年度の制度改革(GPA制度、CAP制、成績評価のガイドラインなど)と教育の質保証につての話題、ならびに学生と教員を対象にしたアンケート調査の結果についての報告です。これらの取り組みにより、GPAの向上と安定、学生の自習時間の増加など、一定の効果が上がっていることが紹介されました。

この報告に対し、リム・センター長からは、韓国国内の一般的な現状として、GPAのインフレーションが起こっており、GPAが必ずしも信頼のおける数値として機能していないことが紹介されまし

た。韓国では、社会的にも GPA 制度が浸透し、就職などの際に非常に重視されることから、評価を高くしがちになるようです。一方北大では、必要以上に厳しい評価をつけがちなことが課題です。両国で社会状況は異なりますが、GPAを信頼性のある指標とするために、今後も情報を共有しつつ、様々な工夫をしていくことが必要でしょう。

また、アウトカム評価のためのアンケート調査にも参加者の興味が集まりました。ソウル大学では北大ほどの規模の調査は行っていないようです。

昼食後は、イ・ソユン教授が CTL の活動について報告されました。ソウル大における高等教育支援の取り組みは、CTLが総合的に行っています。その活動は、主に教員および博士課程学生に対する教授法の指導(教育支援)、学生に対する(特に英語に関する)学習支援、アカデミック・ライティングおよび e-learning(授業ごとのものと全学的なものを含む)の支援に分けられます。韓国では入試制度が複雑で、学力差のある様々な学生が入学するため、各自に合わせたきめ細かな支援(履修相談、進路相談、学習相談など)を組織的に整備することが重視されています。こうした活動全般についての概



写真1 分科会 (CTL) の様子

写真2 北大の現状報告をする細川教授

略的な説明の後、特にアカデミック・ライティング支援の詳細が、センター内 Academic Writing Lab (AWL) のイ教授により紹介されました。AWL での主な活動は、以下のとおりです。

- ・学部学生への個別の対応

主に授業の課題やレポート、卒業論文の書き方などの相談に応じ、添削指導を行います。相談内容に応じて、各専門の博士課程学生が担当します。学習内容そのものに関する質問もあり、可能な範囲で対応しているそうです。

- ・大学院生への個別の対応

専任の教員(イ教授)が、学位論文の書き方に関する相談に応じます。

- ・講義の開講

各学期に1回3時間程度のアカデミック・ライティングについての講義を行っています。学部別、内容別に開講されます。

- ・教員や部局への支援

特に、教員への支援(ある種のFD)も行われることに特徴があります。これは、全学的規模での学生への指導や、院生への対応などで各専門を熟知した指導を行うことには限界がありますが、指導教員が適切な writing スキルとその指導法を身につけていれば、そこから広範な学生への対応ができるためです。そうした観点からも、学習支援における組織的な整備は大変重要です。

最後に e-learning 関連設備、CTL 内の e-learning contents の制作現場、マルチメディア対応の講義室、スタジオ、講義中継の様子などを視察しました。e-ラーニング支援部は20名を超える職員を擁し小

さなテレビ局並みの設備を備えており、学内の様々な要求に応えられるよう構成されています。元テレビ局職員を雇用し、優秀な教員の講義風景を撮影編集したDVDを頒布しているのは驚きでした。

21日(土)には分科会「国際化の取り組み」で、ソウル大と北大それぞれでの国際化に関する取り組みについて、両大学2名ずつによる現状の発表と、討論が行われました。

ソウル大からは、ユン・フェウォン副学長とパク・ソングジュ交換留学生問題マネージャーから、必ずしも大学そのものの国際化(受け入れ留学生の増加、外国人数員の増加など)ではなく、学生の国際化(学生の海外への留学数の増加、英語による講義数の増加など)を理念として国際化を進めていることが述べられ、現状のデータなどが報告されました。

北大からは、高井哲彦経済学研究科准教授が、留学生数を増やすための様々な試行や奮闘の様子を"strategy"というよりむしろ"struggle"であると報告して、ソウル大の参加者からも共感を得ていました。

また、佐羽内喜久子国際企画課コーディネーターからは、英語による講義のためのFD活動の様子が紹介されました。特に、北大の文学研究科で行われたマイクロティーチングの様子がビデオを交えて詳しく紹介されると、ソウル大の参加者は初めて聞くマイクロティーチングに興味津々の様子でした。

いずれの場合も、機関(大学)、教員側だけの国際化では、特に国内の学生が取り残される懸念があります。制度に即応した学生への支援を同時に充実させなければならないという結論になりました。

(細川敏幸、山田邦雅、斉藤 準)

授業を変える e - ラーニング

～第 15 回 北大教育ワークショップ～

北海道大学教育ワークショップ(全学 FD) は平成 19 年度からは年 2 回開催されています。今年度 2 回目の第 15 回は、2009 年 11 月 6 日(金)、7 日(土)の両日、奈井江町農業改善センター(奈井江温泉ホテル北の湯)で、表 1 の内容で行われました。

今回は、地区 FD コンソーシアムを目指す「北海道地区 FD・SD 推進協議会」の発足を受けて、協議会加盟校からも参加者を募った結果、学外からは、北見工業大学と札幌医科大学から 2 名ずつ、北海道教育大学、北海道情報大学、北海道医療大学、北海道薬科大学、東海大学、苫小牧工業高等専門学校、函館短期大学、釧路公立大学、弘前大学から 1 名ずつ計 13 名、本学各部局からは 28 名の参加者があり、世話係、講師、事務職員など合わせて 48 名で実施されました。

初日は情報教育館 1 階ロビーで集合、8 時 30 分にバスで出発しました。バスの中で参加者の自己紹介を行い、会場に到着後、直ちに記念写真を取り(写真 1)、本堂武夫副学長(総長代理)の挨拶(写真 2)で研修が始まりました。

このワークショップの主要な課題はシラバスの作成法を学ぶことですが、毎回そのときにあったテーマを選んで講演などを行っています。今回のテーマは、今年の 1 回目と同じ「授業を変える e - ラーニング」です。単位の実質化のため、魅力的な授業を工夫して学生の学習意欲の向上を図る、一つの方法として e - ラーニングの活用が考えられます。今回は、「Moodle」というフリーソフトの LMS (Learning Management System) の実演と演習を 1 日目午前中に行い(写真 3)、夕食後に、日本の大学では北大理学研究院の鈴木久男教授によって最初に導入された「クリッカー」について、ミニ講義と実践練習を行いました。

ワークショップでは、参加者を 5 グループに分け、魅力ある授業の工夫を盛り込み、できるだけ e - ラーニングを取り入れて、新しい授業を設計するという課題で、グループ作業を行いました。

授業の設計は、3 つのセッションからなり、(I) 科

目名と目標、(II) 方略(15 回分の授業内容)、(III) 「評価基準」の順に行われました。各セッションは、(1) 30 分程度のミニ講義、(2) 小グループに分かれて 60 分の討論、(3) 討論の成果の全体発表会という 3 つの部分からなるセッションを 3 回繰り返すという構成で、例年のように有意義な会になりました。

今年度から、「新北大方式」ともいうべき、IT を活用した新しいグループ討論の方法を採用しています(写真 5)。この方法は、前回のワークショップで一部のグループで始め、今回は全グループでできるように機材を用意しました。機材としては、パソコン、プロジェクタ、スクリーン(模造紙を壁に貼ったもの)を使います。討論内容をパソコンに入力し、プロジェクタで 2m くらい先のスクリーンに投影し、グループのメンバー全員がそれを見ながら討論します。パソコンのモニター画面を全員で見るのは少し無理がありますが、この方法なら席を立たずに見ることができるので、黒板あるいはホワイトボードの前で討論しているような感じです。討論終了後にはファイルとして記録が残るので、ホワイトボードを使うよりも効率的です。全体討論の発表では、以前は OHP を使用していましたが、今回からは Power Point のみに移行しました。

このワークショップでは、参加者全員が専門分野が片寄らないように A、B、C、D、E の 5 グループに分かれ、それぞれのグループが、あらかじめ指定されている、A と B: 一般教育演習(学生数 20、90 分の授業を週 1 回で 15 週)、C: フィールド型一般教育演習(学生数 20、集中授業 1 週間/月曜日に出発して金曜日に帰る)、D と E: 総合科目(大講堂、90 分の授業を週 1 回で 15 週、6 名程度の講師が交代で行う)、などの科目を設計する課題にいただきました。各グループが設計した科目名、目標は表 2 の通りです。

2 日目には、シラバスの最後の項目「評価」を完成させて、ワークショップを終了しました。最後に、今年度から始められ、本 FD では 2 回目の研修会修了証書の授与式(写真 6)が行われました。

(西森敏之)

写真1 記念写真

写真2 本堂副学長の挨拶

写真3 Moodleの実演と演習

写真4 アイスブレイキング

写真5 「新北大方式」のグループ討論

写真6 修了証の授与式

表1 第15回北海道大学教育ワークショップ プログラム

2009年11月6日(金)

8:15	受付 北海道大学・情報教育館(北図書館の北隣) 1階ロビー 集合
8:30	バス出発 研修開始:オリエンテーション(挨拶,自己紹介)
9:45	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着,玄関前で記念写真
10:00	挨拶 北大副学長(20分)
10:25	ミニ講義「FDの目的と意義」(25分+質問5分)
10:55	休憩(15分)
11:10	実演と演習「e-ラーニング入門」(50分)
12:00	昼食 60分
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング(写真4)(30分)
13:30	ミニ講義「カリキュラムの構成要素とシラバス」・学習目標(30分)
14:00	グループ作業Ⅰの課題の説明・グループ学習室への移動(10分)
14:10	グループ作業Ⅰ「授業の設計1:科目名・目標の設定」(60分)
15:10	発表・全体討論(50分)
16:00	休憩(20分)
16:20	ミニ講義「教育方略」(30分)
16:50	グループ作業Ⅱの課題の説明・グループ学習室への移動(10分)
17:00	グループ作業Ⅱ「授業の設計2:(目標の手直しと)方略」(60分)
18:00	発表・全体討論(50分)
18:50	夕食(40分)
19:30	ミニ講義「クリッカーを使う授業」(30分+質問10分)
20:10	懇親会

2009年11月7日(土)

7:30	朝食
8:30	ミニ講義「教育評価」(30分)
9:00	グループ作業Ⅲの課題の説明・グループ学習室への移動(10分)
9:10	グループ作業Ⅲ「授業の設計3:(方略の手直しと)評価」(60分)
10:10	発表・全体討論(60分) — 休憩(10分) —
11:20	修了証授与・参加者の個人的感想や意見(40分)
12:00	昼食(60分)
13:00	バス出発
14:30	JR札幌駅北口到着

表2 各グループが作成したシラバスから：科目名と目標

<グループ A>

【科目名】一般教育演習「大学を100倍楽しむ方法」

【一般目標】

大学生活を充実したものとし、楽しむために、

- ① 自分自身を理解する
- ② 将来の目標を見つける

【行動目標】

- ① 自分自身を理解するための知識、あるいはスキルを説明できる。
- ② 自分自身を他者、および自分自身で分析し、客観的に説明できる。
- ③ 先達の事例を調べ、それについて説明できる。
- ④ 将来の目標、あるいはそのヒントを見つけ、目標を達成するための過程を説明できる。

<グループ B>

【科目名】一般教育演習「表現の作法」

【一般目標】

- ① 必要な表現の作法を修得するために、論理的な思考を身につける。
- ② 多様なバックグラウンドを持つ人と討論ができるように、コミュニケーション能力を身につける。
- ③ 理系文系を問わず、学際的な思考力を身につける。

【行動目標】

- ① 課題に対する問題設定能力を身につける。
- ② 課題に対する必要な情報を収集することができる。
- ③ 小論文を書けるようにする。
- ④ プレゼンテーションができる。

<グループ C>

【科目名】一般教育演習（フィールド型）「北海道における酪農を知ろう！」

【概要】5日間のフィールド体験を通じて北海道の農村部の現状、問題点を見出し、その解決策を考える。

【一般目標】北海道の農村での問題点を認識するために、自分の身体をもって体験し、解決策を考える。

【行動目標】

- ① 北海道の酪農家に滞在し、酪農家の実態を肌で感じることができる。
- ② 酪農家の現状、問題点を把握し説明できる。
- ③ 各自が問題点に対する解決策を提示できる。
- ④ 学生間の討論を通して意見を表明する能力を身につける。

<グループ D>

【科目名】総合科目・環境と人間「環境と社会のあいだ」

【概要】地球環境問題の現実をふまえて人間と自然環境の関わりについて理解を深める。

【一般目標】

- ① 自然と社会の関わりについて意見を持つことができるように環境問題の現状と課題について認識する。
- ② 環境問題を理解するために科学的なものの見かたを身につける。

【行動目標】

- ① 地球環境問題について調べ具体的に述べることができる。
- ② 環境に関わる法律や制度について比較することができる。
- ③ 環境をめぐる社会問題について自分の立場を明確にし、論理的に意見を表明できる。
- ④ 科学的知見と政策を区別することができる。

<グループ E>

【科目名】総合科目・環境と人間「地球環境の未来像」

【一般目標】人類が共有する地球環境の未来を守るために、温暖化、森林・エネルギー問題等の地球環境に関する諸問題を理解し、問題解決に向けて主体的に取り組む意識を持つ。

【行動目標】

- ① 地球環境問題の経緯を説明できる。
- ② これまでの環境問題に対する取り組みについて主体的に評価し、レポートにまとめることができる。
- ③ 解決策を提案した上、それについて議論できる。

※【一般目標】は北大のシラバスでは「授業の目標」、【行動目標】は「到達目標」に当たります。
行動目標（到達目標）は、学生がこの授業を通して身につけるべき能力を具体的に示し、成績評価の基準になります。

「シラバスコンクール」推薦科目を公表

北大では、各授業科目のシラバスを、平成12年度からホームページに公表するとともに、教育ワークショップなどで授業設計の方法、シラバスの書き方について指導を行い、内容改善をはかってきましたが、このたび、来年度以降のシラバスの改善に役立てていただくため、センター全学教育部、高等教育開発研究部、全学教育科目責任者及び次世代FD研究会の協力のもと、「シラバスコンクール」として、平成21年度の全学教育科目、学部専門科目、大学院科目のシラバスの中から、参考となるもの31科目を選んで公表しました。

<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/syllabus/syllabus2009/top.html> (センター HP 参照)

シラバスは、部局、課程、授業科目の性質により、きわめて多様であり、一律に「模範例」を挙げることは困難で、今回公表したものはあくまでも「参考例」です。良いシラバスとはどのようなものか、今後も部局、課程、授業科目等ごとに、関係教員グループで議論を深め、学生の役に立つシラバスを作ることが求められています。

なお、北大のシラバスについては、外部評価や今回のシラバスの点検・選択の過程で、いくつかの改善点が指摘されています。シラバスの作成に当たっては、以下の点にもご留意ください。

- 1) 必須項目(授業の目標、到達目標、授業計画、準備学習(予習・復習)等の内容と分量、成績評価の基準と方法)はもれなく、できるだけ具体的に記述してください。
- 2) 「授業の目標」(一般目標)と「到達目標」(行

動目標)を明確に区別し、それぞれ(教員ではなく)学生の視点から記述してください。

「授業の目標」(一般目標)では、授業で扱う内容の概略を、たとえば「〇〇について理解する」の形式で、できるだけ具体的に記述します。

「到達目標」(行動目標)では、この授業で学生がどのような能力を身につけることが期待されているかを、たとえば「〇〇することができる」の形式で、できるだけ具体的に記述します。

- 3) 「到達目標」(行動目標)と「成績評価の基準と方法」は、密接に関連づける必要があります。
- 4) 「授業計画」と「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」については、2単位の授業科目では、定期試験の期間を除いて、最低でも30時間(15回)の授業時間の確保が必要とされ、また、教室内外の学習を合わせて、標準的に90時間の学習が必要とされていることを念頭において、両項目を密接に関連づけ、できるだけ具体的に記述してください。
- 5) 「成績評価の基準」においては、単純に出席を点数化して加算することは厳格な成績評価を実現するうえで問題とされています。学生が能動的に参加する授業計画を立て、授業への積極的な参加を評価する授業設計が必要です。
- 6) 部局独自の様式のシラバスでも、「授業の目標」(一般目標)と「到達目標」(行動目標)を区別し、「授業計画」と「準備学習(予習・復習)等の内容と分量」を関連づけて記述してください。

(安藤 厚)

生涯学習 LIFELONG LEARNING

北海道地区大学 SD 研修
「大学職員セミナー」を開催

大学職員セミナーは、大学職員が教員とともに大学改革の重要な担い手として、その専門性を高める学習・研修の場として、高等教育機能開発総合センターと教育学研究院の共催により事務局の協力を得て、2006年度から北海道大学の公開講座として実施し、これまで4回開催してきたものです。

今年度は、これまでの取組の成果を踏まえて、高等教育センターと教育学研究院、総務部人事課・学務部教務課が主催し、北海道地区大学FD・SD推進協議会設立の準備と並行して、道内の大学にご案内するとともに、例年のように私立大学協会からのご協力をいただきました。

はじめて日程を10月15日・16日、1泊2日の合宿とし、情報教育館で開会行事を行った後、会場を学外に移し、歌志内市のかもい岳温泉ホテルで行いました。紅葉の中、池田輝政名城大学副学長の「大学改革と職員の本気度」、大学コンソーシアム京都の志水章人事務次長の「大学職員に求められる能力とはどういうことか」の2つの講演、参加者による「大学職員の働きがいとキャリア形成」をテーマとするワークショップを行いました。

参加者は22名で、北大が9名、他の国公私立大学・高専が10校13名（うち私立大学が5校7名）でした。教員（高等教育センター4名、教育学研究院2名）、教務課職員3名が同行しました。

合宿形式には参加者の多くが賛成でしたが、合

宿であるために参加できなかった職員がいることも考える必要があります。女性の参加が少なかったこともそのためである可能性があります。

事後の感想には、「年齢、担当業務も異なる方々が集まっているため、様々な方のお話(ワークショップ)が聞けて、たいへん良かった」、「他大学の専門が同じ職員との交流は、吸収する所の多いものであった。また、今後こうした機会があれば参加したい」、「合宿という形式がよかったと思います。思いがけない他大学での問題解消法など、職場にもって帰って参考になる話がたくさん聞けました。また、教育の専門家集団との連携であることで、ワークショップ等でご助言も頂いたり、職員間では偏った意見交換を第3者の視点で頂いたので心強く思いました」、「グループワークは、初めての経験でありましたが、全員が協力し議論しあいながら一つのものを作りあげていく作業がこんなに楽しいものとは思いませんでした。一つの目標に向け、全員が同じ方向を向いて作業を行なうことで、一体感が生まれ、とても良い雰囲気でした。今後の業務に生かしたい経験でした」などの声がありました。

ワークショップや最後の講評の時間が少なかったという参加者の声なども踏まえて、来年度のセミナーに生かすとともに、この実践を踏まえ北大におけるSDをいかに進めるかについても提言を行っていきたいと考えています。(木村 純)

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

高校生の全学教育科目聴講が本格的に始まる

～北海道大学高大連携授業聴講型公開講座～

高校生による全学教育科目の授業聴講は、平成16～20年度の「高大連携科目に関する研究会」による5回の試行を経て、今年度から「北海道大学高大連携授業聴講型公開講座」という新しい制度のもとで本格的に実施されることになりました。制度化については、2007年度に教育改革室に設置された「北海道大学における高大連携の在り方検討WG」で検討され、教育改革室及び役員会等で審議され、本年9月30日に各高校と協定書が締結されました。当面は第2学期の月～金の5講時に開講される全学教育科目を対象に実施します。

今年度は試行で実績のあった高校に参加を呼びかけ、3校（札幌旭丘、札幌北、藤女子）、計18名の高校生（2年生3名、1年生15名）が、一般教育演習6科目、総合科目5科目、主題別科目4科目を聴講しています（表1）。生徒たちは、大学

の授業に対して大きな期待を持ち、「北大生になったつもり」で意欲的に授業を聴講しています。

授業開始に先立ち、9月28～30日にオリエンテーションを実施しました（授業日程の関係で学校別に実施）。高校生はまず情報教育館4階多目的共用教室（2）または多目的中講義室で全学教育科目の概要と授業聴講の留意点などについて説明を受けた後、高等教育センター及び周辺施設を歩き、授業の行なわれる教室を確認し、北図書館で利用についての説明を受けました。

高校生を受け入れて下さった先生方の多大なご配慮とご協力に感謝申し上げます。高等学校側の期待も大きく、生徒の学習支援や来学のための移動など各学校の状況に即した対応策が試みられています。今後とも、高校生の聴講に対するご支援とご助言をお願いいたします。（山岸みどり）

表1 聴講科目名、担当教員、聴講者数

科目名	講義題目	担当教員	所属	聴講者数
一般教育演習	国際政治とアフリカ	鍋島 孝子	メディア・コミュニケーション研究院	1
同上	数理的思考とコンピュータ： コンピュータは電気羊の夢を見るか？	工藤 峰一	情報科学研究科	1
同上	社会科学入門	菅原 寧格	法学研究科	1
同上	経営戦略を考える	宮部潤一郎	メディア・コミュニケーション研究院	1
同上	サステイナビリティ・ガバナンス・プロジェクト —持続可能な社会・地球環境について考える—	早坂 洋史	工学研究科	1
同上	建築と都市	小澤 丈夫	工学研究科	1
総合科目：環境と人間	北大総合博物館で学ぼう—ヒグマ学入門—	天野 哲也	総合博物館	1
同上	脊椎動物の生態と進化	坪田 敏男	獣医学研究科	1
総合科目：健康と社会	なぜ病気になるのか—治療医学から予防医学へ—	武蔵 学	医学研究科	2
総合科目：人間と文化	プログラミング入門 Ruby 誰でもプログラミング	岡部 成玄	情報基盤センター	2
同上	東欧：ロシアと西欧のはざままで	家田 修	スラブ研究センター	1
主題別科目：歴史の視座	古代ローマと奴隷制	砂田 徹	文学研究科	1
主題別科目：社会の認識	グローバルな時代の社会論	鈴木 敏正	教育学研究院	1
同上	犯罪・非行にみる日本社会	長井 長信	法学研究科	1
主題別科目：科学・技術の世界	地球惑星科学のフロンティア	池田 隆司	理学研究院	2
計	15 科目	15 名		18 名

センター日誌 CENTER EVENTS, September - November

9月

3日～4日

- ・(研究会) 東北・北海道地区大学一般教育研究会(岩手大学)

4日～5日

- ・(研究会) 次世代FD研究会(かもし岳温泉)

10日・(説明会) 岩見沢東高校での北大説明会

15日・(会議) 全学教育科目責任者会議(全体会)

19日・(説明会) 進学セッション2009

25日・(会議) 第3回センター運営委員会(持ち回り)

28日・(会議) クラス担任連絡会(平成21年度第2回)

10月

8日・(会議) 北海道地区FD・SD推進協議会設立総会

8日～9日

- ・(行事) 北海道高校文化連盟理科研究審査委員の派遣

9日・(会議) 第5回教育改革室会議

10日・(行事) 北大セミナー in 北見

11日・(説明会) 主要大学説明会2009(札幌)

15日～16日

- ・(研修会) SD研修「大学職員セミナー」(かもし岳温泉)

13日～20日

- ・(行事) AO入試・帰国子女入試願書受付

19日・(会議) 「主題別科目」責任者会議

20日・(会議) 「文系基礎科目」責任者会議

22日～23日

- ・(会議) 全国国立大学生涯学習系センター研究協議会(岐阜市)

23日・(訓練) 高等教育機能開発総合センター等合同自衛消防隊による総合訓練

25日・(行事) 秋のキャンパスツアー

27日・(会議) 「外国語科目」責任者会議

29日・(説明会) 札幌稲雲高校に対する大学説明会
(プロフェッサービジット企画)

30日・(会議) 第6回教育改革室会議

- ・(来訪) 長岡技術科学大学

31日・(行事) 北大進学相談会(名古屋会場)

11月

1日・(行事) 北大進学相談会(大阪会場)

3日・(行事) 北大進学相談会(東京会場)

7日・(説明会) 札幌大谷高校に対する大学説明会
(プロフェッサービジット企画)

6日～7日

- ・(研修会) 第15回北海道大学教育ワークショップ(奈井江町)

9日・(説明会) 滝川高校に対する大学説明会
(プロフェッサービジット企画)

10日・(行事) AO入試・帰国子女入試第1次選考結果発表

- ・(行事) 札幌旭丘高校学問研究会

- ・(会議) 入学者選抜委員会

13日・(説明会) 代々木ゼミナール札幌校での北大説明会

17日・(説明会) 伊豆中央高校に対する大学説明会
(プロフェッサービジット企画)

19日～21日

- ・(行事) 北大・ソウル大合同シンポジウム(ソウル)

21日・(説明会) 駿台予備校主催進学相談会(札幌)

22日・(行事) AO入試・帰国子女入試第2次選考日

24日・(会議) 成績評価・授業評価結果検討専門部会

25日・(会議) 第4回センター運営委員会(持ち回り)

26日・(会議) 第7回教育改革室会議

27日・(会議) 全学教育委員会小委員会

30日・(行事) 札幌南高校に対する大学院生による学問・研究紹介(札幌)

行事予定 SCHEDULE, January - March

	【日(曜日)】	【行事】
1月	5(火)	授業再開
	15(金)	センター試験準備(休講)
	16(土)～17(日)	大学入試センター試験
	21(木)	木曜日の授業終了日
	28(木)	初習外国語統一試験日(通常授業は休講)
	29(金)	金曜日の授業終了日
2月	2(火)	火曜日の授業終了日
	3(水)	水曜日の授業終了日
	4(木), 5(金)	月曜日の授業を行う日(木曜及び金曜授業終了済)
	8(月)	月曜日の授業終了日(第2学期授業終了日)
	10(水)	成績報告締切(非常勤[帳票])
	18(木) 正午	成績報告締切(常勤[Web入力])
	25(木)	北海道大学第2次入学試験(前期日程)
	26(金)	平成18～21年度入学の1年次学修簿Web上公開
	26(金)～3月4日(木)	1年次成績確認期間
3月	12(金)	北海道大学第2次入学試験(後期日程)
	中旬～下旬	学科分属手続き:当該学部

センターニュース 2009, No. 81 目次

＜巻頭言＞生涯学習計画研究部のこれからの課題 木村 純	1
北海道地区 FD・SD 推進協議会設立総会.....	4
国際化加速に向けた FD ～目指せ！バイリンガル大学～	5
アカデミック・サポート推進室が発足	8
ICT 活用教育セミナー（予告） ～ e- ラーニング運用と ICT 活用の効果～	10
UC バークレー校の講師による 大学院生のための大学教員養成研修講座（予告）...	11
全学教育委員会報告（第 78 回）	12

北大・ソウル大合同シンポジウム 「大学での学習の質をいかにして高めるか」 「国際化の取り組み」.....	14
授業を変える e- ラーニング ～第 15 回 北大教育ワークショップ～	16
「シラバスコンクール」推薦科目を公表	20
北海道地区大学 SD 研修 「大学職員セミナー」を開催	21
高校生の全学教育科目聴講が本格的に始まる ～北海道大学高大連携授業聴講型公開講座～	22
センター日誌・行事予定	23
目次・編集後記	24

編集後記

東山魁夷を観た。青を巧みなまでに使い分ける筆致の裏に、類い希なる師の固執性と正確性を見た。

事業仕分けによって、我が国の科学技術が一部存亡の危機に立たされている。資源の乏しい日本が「科学技術立国」を標榜する意味は極めて大きい。創造性や独創性で、世界と対峙していかなければならないからだ。

しかしそれを標榜するには、例えば初等中等教育ではどのような資質を育むべきか、ポスドクをどのように有効活用するか等々、社会全体での人材育成の議論が必要不可欠である。

羅針盤無くしては、舟は沖には出られないのである。

（うさぎ）

センターニュース 第 81 号

（北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌）

発行日：2009 年 12 月 25 日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目

電話 (011)706-7520・FAX (011)706-7854

編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・山田邦雅・安藤 厚

木村 純・川初清典・亀野 淳・三上直之

山岸みどり・鈴木 誠・池田文人

ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：

<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>